

5月号の主な記事: バレエ・リュスを超えて

マギー・フォイヤーが、イングリッシュ・ナショナル・バレエの芸術監督ウエイン・イーグリングの企画した2つのプログラムを讃えます。

イングリッシュ・ナショナル・バレエ(ENB)の、“バレエ・リュスを超えて(Beyond Ballets Russes)”は、2つのミックス・プログラムに新作とディアギレフ時代の作品を収まりよく並べた、稀に見る刺激的な公演だった。このところ同団の踊りの水準はきわめて高く、ゆるぎのない力量を持ったダンサーの周囲に、注意深い指導によってみるみる開花しつつある若手が配されている。だが今シーズンはまた、理事会がすぐれた視点を持つイーグリングの解任を決定した点でも、私たちの記憶に留まることだろう。最悪の、愚かな決定である。

ジョージ・ウィリアムソンの『火の鳥』は、振付家の大胆さと、それに対する上層部の信頼が感じられる果敢な作品。完成度は決して高くないが(環境問題を取り上げた物語は語り口が間接的で明確な方向性に欠くが、一方で衣裳は役柄を細かく特定するもので、メッセージの伝え方がちぐはぐだった)、作り手の才気ははっきりとうかがえる。クセニヤ・オヴスキャニクの火の鳥は、射抜くような視線と手の動き、高いジュテや燦然たるアラバスクに、魔法の鳥の威厳と脆さが結晶して素晴らしかった。

ケネス・マクミランの『春の祭典』は、美術をキンデア・アグギーニのものに一新しての再演。タマリン・ストットが“選ばれた乙女”役に初挑戦し、みごとにこれを踊った。アグギーニの美術は古代という設定からは離れているが、信仰の感覚(作品が作られた1960年代と比べ、わずかに都会的な匂いがするが)は残されている。同じくストラヴィンスキーの曲を用いて新時代への扉を開いたバレエであり、19世紀的な趣味をはぎ取り、ギリシャ神話の時代に立ち返ったジョージ・バラランシンの『アポロ』では、ズデニク・コンヴァリーナがタイトル・ロールにふさわしい資質、つまり若さや大胆さ、古典的なシンメトリーに現代的なスパイスを効かせることを恐れない勇気を示した。オープニングのソロでやすやすと舞台空間を自分の世界にし、シンコーションを効かせ美しく踊るミュージズたちをも虜にする。テレシコレ役のダリア・クリメントヴァは彼と釣り合いがよく、パ・ド・ドゥではアポロへの優雅なる恭順を示しつつ威厳に満ち、いかにも舞踊の女神らしかった。

『遊戯』はイーグリング自身の振付で、世界初演。彼の作品の中でベストともいえる、印象的な佳品である。多くの資料を参照した成果で、時代感覚は明確(シャネルのクラシックなコートが眼福)である。スポーツ礼讃の当時の雰囲気は穏やかに、そしてびりりと風刺を利かせつつ愛嬌のあるトーンで描かれ、しかも重層的な深みがある。振付家/ニジンスキーの2役のドミトリ・グルジェーフは、台本を書き、リハーサルをし、現実と夢のあやういバランスをとりつつ空想の自作を踊る。パワフルで創意に富んだ作品で、同じくスポーツをテーマとするニジンスカの軽快な『青汽車』と併せて上演されたのも、理想的だった。ワディム・ムンタギロフは今シーズン本格的に才能を開花させ、ここでも期待通りのテクニックに自虐的なユーモアを加えて、魅力を増していた。



マクミラン振付『春の祭典』で、“選ばれた乙女”を踊る高橋絵里奈
Photo: E. Kauldhar/Dance Europe

第1のプログラムでは、オリジナルと新作が続けて上演されたのは、『牧神の午後』と『Faun(e)』である。由緒あるニジンスキー版はときに主演者にとって重圧だが、アントン・ルコフキンは唇に滲えた笑みに牧神の官能性を香らせて、バクストの豊饒なセットの前でくつろいでいた。デイヴィッド・ドーンソン振付の『Faun(e)』は、劇場芸術としてのバレエの本質であり原型のような作品である。がらんどうの舞台には2台のピアノとがらくたの劇場装置。ドーンソンはニジンスキーの振付を細部に至るまで再検証する。彼のスタイルを熟知したラファエル・クメ＝マルケは、匠の技でバレエ技術を過去から現在へと一世紀移行させ、ジャン・カシエは弟子のように、それに従うのである。このような秀逸なプログラムを次に見るのは、いつのことになるだろうか。

第2プログラムを華やかに締めくくったのは、メイナ・ギールグッドの上演指導による『白の組曲』である。初日のキャストは最高ともいえるもので、高橋絵

里奈はコンヴァリーナとのパ・ド・ドゥとエレガントなフルートを踊り、エレナ・グルジェゼのシガレットは、振付がまるでDNAの一部に組み込まれているかのように官能的だった。ヨナ・アコスタのマズルカは滑空するようで、技術的な難しさを全く感じさせないばかりか、リズムに乗って軽やかに身体を揺らしながら、新たな自由を獲得したようにさえ見えた。まことに、長く記憶の中で慈しむべきシーズンであった。(訳:長野由紀)